

# 中 支

## 軍隊生活四十七カ月の回顧

香川県 横山 松次

### 家庭を愛して

私は昭和十六年徴集の現役兵ですが、昭和十一年四月より家業を手伝うことになった。兄は昭和十二年一月十日に、佐世保海兵団に入隊した。咲山といつて坂手より二里も離れた山の中の一軒家です。家業は春の鯛網を三升(ます)を張り、坂手では一番の大漁師でした。鯛網は小豆島では一番古い元祖の漁でした。漁の最盛期には、何十貫も百貫冨も一日の水揚げがあった。

鯛網には大勢の人を使っていた。サワラも良い日には百貫も水揚げされた。夏秋冬は父と二人で漁を行ない、父と私は漁の合間には畠仕事をしていた。母は農業専門でした。水田五反、果樹と畠が五反以上もあった。日曜祝日もほとんど休むこともなく、一生懸命家業を手伝っていた。

昭和十六年三月の徴兵検査では第一乙種合格でした。兵科は山砲隊で、八月に松山歩兵第一二二連隊入隊と決定した。丁度このころアメリカ、シアトルより父の末の妹の叔母が下の子供一人を連れて帰っていた。坂手の母屋で祖母の所にいました。当時のアメリカと日本との関係はますます悪化していた。食糧も配給で他の物資も少なく、生活も次第に苦しくなっていた。パンも配給でした。叔母は食べる物もない日本

にいては、栄養失調になるといって、昭和十六年十月末、日本よりアメリカへの最後の船便で帰って行った。そして十二月八日に太平洋戦争が開戦となった。

兄は年に三回程度休暇で家に帰っていたが日米開戦で帰れなくなった。当時の出征兵士の家には「誉れの家」と書かれた木製の表札型の物が玄関に掛けられていた。兵隊にいく年頃の人は皆戦争に行く決意は堅く、血沸き肉踊る思いでした。私が気になるのは家のことと病弱な父の体調のことでした。父は次男の私が兵隊に行けば、手足を奪われたも同様だとこぼしていた。

昭和十七年一月七日夜、親戚の皆さん、友達も大勢来て、お別れの祝宴が賑やかに行なわれ、妹が「暁に折る」を踊ってくれたのが大変に嬉しかった。両親も兄弟も祖母も総ての人にお別れを言って、翌朝古江より乗船した。

坂手村からは森脇桂君も松山の歩兵部隊に入隊することになっていた。二人は一緒に行った。高松の叔父さん宅で一泊。九日朝九時、高松駅発軍用列車に見送りに来ていた父と乗車した。当時小豆島では出征兵士

を団体で、見送ることは禁止されていた。高松では大勢の出征兵士が乗車した。たすきを掛けた国防婦人会の人が賑やかに見送りをしていた。この列車は各駅停車で次々と出征兵士が乗ってきた。松山着は夕方でした。

旅館で一泊し、十日朝衛門の前で父と別れ、松山歩兵第一二二連隊入隊。同日、独立混成第十一旅団（才）砲兵隊に転属した。中支派遣軍であった。父は二月二十日頃に面会に来てくれた。私達は松山市の増我国民学校で軽訓練を受けながら出発の日を待っていたが、父とはこれが最後の別れとなった。同年四月二十九日胃潰瘍のため亡くなった。私とその知らせを受けたのは六月中旬頃であった。

#### 名誉の出征

昭和十七年二月十日の夜、国防婦人会の方々の歓呼の声や旗の波に送られて坂出港を出航した。私は元よりお国のために粉骨砕身、生きて祖国の土を踏まぬ覚悟で出征した。荒れ狂う玄界灘を渡り十六日江蘇省呉淞、官村鎮着、独立混成第十一旅団砲兵隊第一中隊に

到着。第一中隊は山砲隊、第二中隊は野砲隊である。

私が所属する部隊長は松山少佐、中隊長は藤田中尉。官村鎮は電気もない街であった。同月二十五日武進県湊里鎮に移動後、九四式山砲の厳しい訓練の連続であったが、砲兵隊は解散。四月十七日曳船で蘇州へ、四月二十日独立混成第十一旅団復員完結。同日第六十師団独立歩兵第四十七大隊に転属。七月一日歩兵砲中隊に編成編入完結。第四十七大隊長大沢大佐、中隊長畑中尉、教官山本少尉、永井、松井両見習士官であった。私たち山砲出身者は一、二班で連隊砲です。三、四班は大隊砲であった。七月二日山砲出身の大川軍曹外私と四名（初年兵）が大平橋鎮分遣隊に勤務したが、勤務交替のため青木軍曹が分遣隊を引き継ぐ際、互いに拳銃で射ち合い、二人共不慮の死を遂げた。私は九月二日、中隊に復帰した。二人の死は私の前途にマイナス面が多かった。

#### 第四十七大隊宜興に移動

昭和十八年四月八日、第四十七大隊は蘇州より宜興に移動。兵器、馬は貨車に搭載し、兵員は客車で常州

駅に下車した。宜興まで、砲弾薬は繋駕で行軍した。

この時の歩兵砲中隊長は、山本中尉であった。宜興に着いて、山野兵長を長として私と三名は竜頭山分遣隊に配属された。竜頭山には第四中隊が下士官以下五名、合計八名で警備していた。竜頭山は二百数十メートルの山で、この陣地には九四式山砲が備えられており、私には懐かしいお得意の砲である。

頂上に宿舎があり四方が見渡せる。宿舎の屋根より落ちる雨水を溜めて入浴をしていた。この山は太湖の西側に当り、右前方は太湖を一望する景色が実に美しく、故郷の瀬戸内海を偲ぶ眺である。飲料水は労務者が下界より運んでくれた。肅正のため下界に行くが、帰りの上る道は一苦勞でした。

同年六月末、私は中隊復帰した。七月一日付、部隊本部の軍医、高橋見習士官の伝令勤務を命ぜられた。本部での勤務は他中隊の伝令に大変に気を使う仕事であった。

同年九月三十日廣徳作戦に参加した。部隊長は須川大佐。作戦参謀は橋本大尉であった。部隊本部での勤

務であつたので、一度も戦闘はしなかつた。部隊は廣徳よりさらに奥地の張猪鎮に駐屯した。歩兵砲中隊も張猪鎮に駐留していた。

昭和十八年十一月末、中隊に復帰。張猪鎮には高丘の上に三八年式野砲が備えられ、第一中隊が整備していた。十二月一日。落合兵長、宇南山上等兵（二人は召集兵で年輩の人）と私の三人はこの野砲のある陣地に配属になり勤務した。小銃隊より七名合計一〇名であつた。この陣地は第六十師団の最前線であつた。昭和十九年七月中旬ころ、中隊復帰命令で中隊に急ぎ帰る。中隊では作戦参加のため各種検査も終わりに出動準備を整え出動を待っていた。

#### 浙閩沿岸作戦に参加

昭和十九年七月十八日作戦命令が出た。内海汽船の曳船で宜興出發、常州まで水路を進み、人馬共下船。完全武装で無風で焼け付く炎天下を行軍した。早くも日射病で倒れる者が数名いた。その内の一人が私であつた。当夜は常州の警備部隊で一泊、翌朝常州駅で兵器弾薬、馬匹は貨車に搭載し、兵員は客車に乗車。

作戦地は一切秘密で將校にも知らされてなかつた。終着駅の金華で下車。市街地からかなり離れた山裾の淋しい部落で、貧弱な農家が連隊砲小隊の宿舎となつた。中隊とは、かなり離れていた。我々兵、下士官に初めて作戦地は浙江省の温州と告げられた。作戦準備訓練は主として山岳地帯を想定した。砲の駄載と急坂道の昇降と山岳地帯の射撃訓練が行なわれた。中隊命令は完全軍装で訓練することが義務付けられていたが、ほとんど全員軽装で出ていた。私は、もし作戦中に倒れてはいけなと思ひ実に苦しかったが、一度も軽装にしたことはなかつた。いかに暑くともいかに苦しくとも私の決心は堅かつた。最後まで完全軍装で訓練に励んだ。

約一カ月の訓練で耐久力がつき、元氣一杯で作戦に参加できる自信が付いた。

#### 作戦開始

昭和十九年八月十八日、金華出發。旅団司令部梨岡寿男少將。独立歩兵第四十七大隊長後藤学少佐。独立第五十大隊長林大佐。第六十一師団集成大隊長小野大

尉。独歩第一〇四大隊長野村中佐。我が歩兵砲中隊長  
山本義男中尉。連隊砲小隊長秋場衛少尉。大隊砲小隊  
長保坂少尉。

麗水城攻略のため、旅団の前衛は我が後藤部隊で敵  
を打ち破り進撃を続けた。歩兵砲中隊は砲を駄載で歩  
兵部隊の後方を行軍し、前衛隊が敵を駆逐する銃声を  
聞きつつ進んだ。砲は六ツに分解される。砲身、搖架、  
大架、託架、防循、車輪、以上の順に駄載されるが、  
五番目は防循馬として、防循を馬の背に、車輪は馬の  
両側に付ける。一〇〇〇メートル級の山々が連る仙霞  
嶺山脈を越える行軍である。休憩には砲、弾薬を馬よ  
り降ろし、馬には水を汲み吞ませる。馬の蹄鉄を点検  
し落鉄の保護に努める。出発の号令で砲を駄載する。  
全員休む暇なく行軍が続行される。次第に人馬共に疲  
勞が激しくなる。ついに携行食も使い果し、近くの民  
家に食糧を求めて行くが何にも無い。

ある日、小粒の蒸し馬鈴薯が一握り配給され雜糞に  
入れた。行軍中に食べようと雜糞に手を入れると、底  
に穴が開いて馬鈴薯は一粒も無かった。麗水城が近く

なるにつれ夜行軍も激しくなる。連夜の行軍になると  
馬に曳かれて眠ったまま歩いている。先行隊を追って  
必死の行軍が続いた。木の繁みに入ると道は真暗闇で  
ほとんど何も見えない。行軍中崖を下るのに馬を空に  
して、転落防止のため馬の尻尾にロープを結び何人か  
が上からロープを引き、馬を下に降ろして進んだ。

砲、弾薬、鞍も人力で分解搬送した。連隊砲は、九  
四山砲より重い。砲身で八六キロ搖架が一番重く、九  
四キロはある。二人で担いで行くので大変です。私は  
何事も率先して隊のために必死で働いた。麗水城は金  
華と温州のほぼ中間に位置し、飛行場も有する敵の重  
要拠点である。後藤部隊は旅団の到着も待たず夜襲戦  
を敢行し、城門に接近し梯子を掛け、城壁に登り、城  
内戦で敵を壊滅させ占領した。城門近くの河に敵の死  
者が数百人も落ち浮んでいた。

歩兵砲中隊もようやく目的の麗水城に至り二日間の  
大休止となった。高田一等兵は疲労のために力尽き死  
亡した。兵器の点検手入れ、鞍傷馬の手当、休む暇も  
なく全員が徹夜で食糧の確保に必死になった。幸に農

家には粃米は沢山あった。唐臼、唐箕、ケンド、などを使用し、水車を廻して白米が出来た。農業出身者は道具の使用法をよく知っていた。携行食も確保出来た。

#### 温州目指して苦闘の進撃

温州に通ずる道の左側は甌江の川で何十メートルも深い断崖が多く、敵は我が軍の進行を阻止するため、道路を爆破したのが数か所もある。我が工兵隊は応急修理に丸太を数本並べているが、一步でも踏み外すと、十数メートルの断崖に転落する。砲、弾薬は二人で担いで分解搬送し、馬は一頭づつ慎重に渡す。真暗闇の中で、小隊長の兵員に注意を促がす声が闇の中で響いていた。その時一頭の馬が谷底に落ちた、馬は骨折で再起不能となった。この馬部隊の必死の苦闘は他部隊では誰も計り知ることには出来ない真実である。

友軍の援護射撃など行ないつつ河原を進み集落に入った。篠原一等兵は哀れ、歩行も息も乱れ、ついに死亡した。またも食糧がなくなった。粃入りの米で雑炊を煮たが食べられなかった。少し平坦な所に来ると畑には、砂糖黍がいたる所に沢山あった。皆、砂糖黍を

しゃぶりながら黙々と歩いた。川の流れの中を歩くので皆足を痛め歩行が大変であった。

山の方から突然に迫撃砲の砲撃にあった。砲撃の炸裂する中を人馬の間隔を取り、砲撃を無視して進行した。

集落に入り民家で宿営した。温州に到着した時は、部隊本部より三日も遅れていた。

#### 温州無血入城

九月九日朝出発、天長領の長い峠道を進む、下り坂に来ると温州の街並みが見える。無血入城と、温州の街並みを見て皆歓喜した。この峠より石段の下り坂で、その石段の中程に来た時、砲の表尺を上下する蝸状螺旋転輪が紛失したことに気付き報告したが、中隊はそのまま進み城内に入る。

街の中は無気味な程静まり、馬蹄と軍靴の音が異様に響いていた。中隊はその夜は丘にある寺に宿営した。

#### 清水分隊長の戦死

十日朝、清水分隊長は中隊で一番元氣な人といって、松本上等兵と私を指名した。清水伍長は私と同期で、

下士官候補の分隊長、松本君は一期下の上等兵です。

私達二人は帯剣と小銃携行で、昨日紛失した蝸状螺桿  
転輪を探しに三人で出發した。異様に静かな街中を進  
み郊外に出てほっとした気持ちでした。細い田圃道を  
進み、昨日通った石段のある坂道に至り、私は先にト  
ントンと石段の中腹まで登り松の木の下で二人を待つ  
ていた、ようやく二人が来たので三人が横に並び二、  
三步進んだ時、すぐ前方の林の中より突然に機関銃で  
乱射してきた。私達は身を隠すところもなく一目散に  
下へ向かって走った。分隊長が倒れて足を射たれたと  
言った。私が走り寄り分隊長の足を見たが異常はない。  
私は分隊長に代わり「松本は一番前、二番は分隊長の  
順に走れ」と大声で言つて必死に走った。

二〇〇メートルほど走ると、分隊長は右に飛ぶよう  
にして田圃の中にウーと呻き声で倒れた。私が走り寄  
り抱き起した時は既に息は絶えていた。首の後から下  
顎に銃弾が貫通していた。雨霰のごとき銃弾で私の身  
辺は物凄い勢の水柱が立ち込めていた。私は素早く分  
隊長の拳銃と帯剣を外した。松本上等兵に走れの合図

で二人は必死に走った。部落の近くに來ると敵の射撃も止る。

他中隊の准尉さんに会つた。事件のことを話すと、  
仇を取つてやると言うので随行したが、機関銃の猛射  
を受け一歩も前進できず、私達は急ぎ中隊に帰り事情  
を報告した。中隊長は二人の無事を喜んでくれた。夕  
方遺体収容に出發した。私が先頭に立ち道案内をした。  
郊外に出ると夕暮れである。細い田圃道を行く。よう  
やく清水分隊長を發見、あたりは暗くなつていた。

分隊長の遺体は担架で運ばれた。分隊長のポケット  
には時計ばかりがコチコチと時を刻んでいた。遺体は  
その夜の内に火葬された。

このころ中国第三戦区の暫編三十三師、新編二十四  
師、國際突擊第三團（連隊）は温州を攻略せんと行動  
を開始していた。突擊第三團は自動小銃を携行し、米  
軍のトツチ少佐が參謀であつた。

連隊砲は甌江下流の寧村へ

九月十一日、連隊砲小隊は、配屬の寧村に行く途中  
彈藥馬の一頭が疲労のため、力尽き倒れて死んだ。我

が小隊には、配属は小銃隊一個分隊だけだった。温州東方二〇キロ地点の寧村で陣地構築を開始した。浙閩沿岸作戦の目的は米軍の上陸を水際で撃退する任務である。十六日に部隊本部より速やかに温州に戻れとの命令である。夕暮れ時寧村を出発、馬には靴「草鞋」を履かせる。防音装置である。敵の銃撃を受けながら夜行軍は肅々を行なわれ、敵中を突破して十七日未明、温州東部の塔高地の地点に進出し次の命令を待っていた。

#### 連隊砲小隊の活躍

小隊長の号令で田圃の空地に砲を据えた。前方の塔より敵の有力な重機関銃の猛射を受け、兵は皆頭を地に伏せたまま身動きができない。ロープに弾薬を縛り引き寄せ、弾薬を装填し発射した。二発で塔の度真中に命中し物凄い炸裂音と共に黒煙が舞い上がった。第一中隊は同時に突撃し塔高地を占拠した。連隊砲も直ちに前進した。敵の連（中隊）隊長ほか多数の兵士が折り重なり斃れていた。連隊砲は常に友軍の援護射撃で目標を一乃至二発で撃破し、東奔西走、息付く暇も

無い猛攻撃を続けた。

營盤山は第二中隊陣地で、我が大隊砲が配属になっていた。数日前の敵と交戦の折、迫撃砲弾の直撃を受け、大隊砲は破損し使用不能となる。保坂少尉数名の戦死者と、数名の負傷者が歩兵砲に出た。第二中隊はほとんど戦死傷者が出て、中隊長貫井大尉以下十数名になっていた。

中国軍二個師団と国際突撃連隊が温州包囲網を締め奪回を目差し猛攻撃を開始していた。營盤山陣地は敵に奪回されていた。その敵陣に連隊砲の砲撃は一発目から命中した。距離は三四〇〇メートルで発射、数発陣地に射ち込んだ。敵陣地は負傷者が続出し担架が次々と山を下っていた。第三中隊の増援で同夜十数名の貫井隊員は決死の夜襲戦で再び陣地を奪回した。梨岡旅団主力は甌江左岸下流で対米軍戦闘に備える陣地構築が任務で、温州守備の我が後藤部隊は、独自にこの二十数倍の敵と戦うことになった。

#### 攻撃は最大の防衛

後藤部隊長は「攻撃は最大の防衛」と包囲する敵の

大軍に対し、総司令部のある平山に総攻撃を決意した。作戰命令により各中隊は夜明け前に温州を出発、猪捕山で連隊砲の隊列が敵に狙撃され二人の負傷者と、馬一頭が貫通銃創された。連隊の大隊砲は友軍を支援し敵の重火器に的確なる射弾を浴びせ、敵陣を次々陥し入れ、敵を敗走させ、翌日温州に帰った。

この頃、歩兵砲中隊は甌海病院を宿舎にしていた。

營盤山の総攻撃に失敗した敵軍は再攻撃の態勢を整えたが、わが部隊の昼夜を分かたぬ度重なる果敢なる出撃戦法で敵軍は全面撤退した。同年十一月一日私は中隊長伝令を命ぜられ、作戰討伐には伝令で活躍した。

昭和二十年一月十日、中隊の兵器係助手を命ぜられた。この頃は温州の住民も戻り店舗も再開され賑やかになっていた。私は同年二月一日付でようやく陸軍兵長に進級した。作戰には夜間の出撃が多かった。敵との夜間の接近戦には合言葉が決められ、全員防音装置を施し、地下足袋を着用し、白の腕章、白褌き姿で行動し、馬には草鞋を履かせ敵に接近し攻撃を行なったこともあった。また駄載の馬も隊員全員が草や木の葉

で偽装して前進したこともあった。愛馬と共に勇猛果敢によく戦い大勝利を得た。我に二十数倍の敵軍を、

温州警備の後藤部隊が敵を壊滅させた。正に梨岡旅団の虎の子と呼ばれ、ますますその名も高く評価された。

昭和二十年二月二十五日、独立混成第八十九旅団(至純)、独立歩兵第五二四大隊に転属編成完了。この作戰の目的は上陸する米軍を水際で撃破することが連隊砲の特殊任務である。対米戦闘訓練は再三行なわれた。この温州後方の平山の戦闘で、大隊砲の浜本勲上等兵が戦死した。彼は初年兵の頃私と、大平橋分遣隊と一緒に勤務した一人でした。彼は香川県の出身でした。

#### 温州撤退作戰

撤退に先立ち、捕虜は所要の取り調べ後、再び軍隊に復帰するなど諭し釈放した。

昭和二十年六月二十三日、連隊砲小隊は塔高地南端に位置し、各中隊の撤退を砲撃で援助した。夜に入り八時頃營盤山方面に爆発がした。地雷の爆裂音である。遙か後方でも爆発の火花が散っていた。

各中隊は渡河を終了した。心配されていた敵の襲撃

もなく、工兵隊の用意された船で人馬共無事に渡河を終了した。後藤部隊は旅団の後衛隊となり雨の中を馱載で行軍した。我が歩兵砲中隊はその夜は甌江左岸の集落に宿営し、早朝出発した。そして数日後、台州の東を流れる河を船で渡河し、嶺口を過ぎしばらく進行し小休止となった。

#### 連隊砲と速射砲に射撃命令

旅団司令部より「右の丘の上に敵影あり、後藤部隊の連隊砲と速射砲は直ちに射撃せよ」と命令された。秋場小隊長の号令により湯浅分隊長に射撃方向が示された。砲手は素早く砲を据える位置に駐鋤溝を掘り砲を組んだ。観測班は目標に対し既に測距、測角も終わっていた。温州攻防戦で百戦錬磨のわが連隊砲は実に迅速確実に準備作業を完了した。

目標に射撃を開始した。一発目から射弾は目標の中心部に着弾した。続いて数発連続発射した。同一目標に射撃を命ぜられた速射砲は、わが連隊砲が射撃を完了後、しばらくたって、ようやく射撃を開始したが、弾着は確認できなかった。

この連隊砲と速射砲の競射は近くで梨岡旅団長、後藤部隊長、速射砲の隊長、わが中隊長の見守る中で行なわれた。敵状は何の変化もなかった。この度の行軍は平坦地が多く敵の妨害も無く楽な行軍である。

#### 第六軍司令官後藤部隊を出迎える

わが後藤部隊は奉化に到着した。第六軍司令官、十川次郎中将閣下は杭州より、わざわざ奉化に向きわが部隊を迎えた。梨岡旅団の代表で、第六軍司令官閣下の閲兵分列を受けることになった。温州作戦で武勲赫々たるわが部隊は、撤退作戦では最も重要な後衛隊の任務を果たした。閲兵分列行進は形通り行なわれた。部隊将兵は歩武堂々として、軍司令官の出迎えに応えた。

#### 奉化で陣地構築作業

歩兵砲中隊は、奉化の市街にある小学校を宿舍にした。奉化県の近くに蒋介石総統の生れ故郷の溪口鎮がある。連隊砲小隊は宿舍から数キロ離れた小高い丘の麓に炎天下の中を毎日砲陣地の構築を続けていた。奉化で討伐に一度馱載で出動したが、敵には遭遇しなかつた。

った。

八月十二日突然、部隊に出動命令が出た。杭州に向かつて行軍を開始したが将校にも誰にも行先は判らなかつた。連隊砲は繋駕で部隊の後方を行軍した。

八月十七日夜行軍が行なわれた。午後七時ごろ道路上で休憩中に日本が降伏したことが判つた。部隊が甯山の街に入ると目抜き通りには中国旗が軒並に掲げられ、蒋介石万歳と書かれている。

#### 終 戦

初めは日本が降伏したことはとても信じられなかつたが、軒並に掲げられた旗を見て、本当なのかと地団太踏みつつ行軍が続けられ、杭州の銭塘江の日本軍施設の宿舎に至り、温州より四〇〇キロにおよぶ行軍は終わった。

この宿舎で十日程過ぎた。八月二十八日、部隊は上海に移動した。わが中隊は杭州で貨車に兵器、馬を積み、兵員は客車で上海駅で下車、東亜同文書院の宿舎に入る。

同文書院内での宿営はしばらく続いたが部隊は呉淞

地区に移動した。同文書院には深沢少尉、兵器係下士官一名、横山、大須賀、曾我部の計五名で毎日兵器の監視で約一ヵ月間、寂しく武装解除の日を待っていた。ある日、私が宿舎外にいと、中国の中尉さんが巡察に来た。私が不動の姿勢で敬礼すると、彼の中尉さんはにっこり微笑み答礼した。

ある日、私と曾我部、大須賀の三人で外出した。衛門は中国兵で守備されていたが許された。街を少し歩いた。日本国発行の軍票は使用出来なかつた。曾我部が中国紙幣を少し持っていたので、中華そば一杯を各自食べて帰つて来た。衛門に來ると先日の中尉さんがいて、私達を衛門のすぐ横の部屋に連れて行き、当番兵に命じて茶を入れたり菓子やら米軍の乾パン、缶詰など食べさせてくれた。

その時、中尉さん曰く、「中国と日本国はこれからは仲良く手を取り合い互いに助け合つて行かねばいけない」と言つた。日中戦争は日本軍が長年にわたり侵略を犯してきたにもかかわらず、我々日本兵に対し寛大なる気持ち、心で接してくれたことは実に有難く感

謝の外はなかった。

### 武装解除

十月十五日、武装解除は東亜同文書院の広い構内で行なわれた。重砲、高射砲と重火器の順に帯剣、拳銃に至るまで奇麗に並べられた。

向い側の列は、重戦車、大型トラック、牽引車、乗用車、自動二輪車の順に並べられていた。日中の立会いの上、中国側に渡された。この時点で私の軍隊生活の総ての任務は終わった。

### 集中営

集中営とは梨岡旅団が呉淞の一個所で生活している、日本軍の捕虜収容所である。私達は徒歩でこの集中営へ急いだ。集中営は日本の工兵隊が古材で建てた長屋で、屋根はトタン葺き、側壁はアンペラ囲い、窓もアンペラ張り、窓の戸は下から上に押し出す。中隊では皆本を読んだり、英会話の勉強をしていた。

梨岡劇団が結成され、座長には浅草の女剣劇にいた大江伝次郎でした。各部隊より芝居好きの者が集まり行なわれた。衣装や道具も一通り揃っていた。「大利

根慕情」で平手造酒に扮した大江伝次郎の芸は見事なものであったが、照明灯に照らされた舞台も格別に良かった。後藤部隊では各中隊の対抗運動会など行なわれた。歩兵砲中隊は何の競技にも優秀であった。

### 帰 国

昭和二十年十二月二日、第一次帰国者の名前が発表された。帰国してその日から働ける生活に何の支障も無い人が優先された。私の名前もあった。中隊で十数名いました。

同十二月二十五日皆に挨拶して集中営を出発。二十一日朝、港で携行品の検査を受け乗船、二十七日出航、二十一年一月一日早朝、鹿児島港上陸。鹿児島の新宿で一泊、二日に復員列車に乗車した。

### 努力をすれば幸せが来る

昭和二十一年一月二日朝、鹿児島駅発東京行復員列車に乗車した。岡山駅は三日の朝だった。宇野港より高松に渡る。高松港は十二時頃だった。高松市は空襲で駅と玉藻公園を残し他は丸焼けで、栗林公園まで一望できた。戦前片原町で「吉野寿司」という寿司屋を

営んでいた叔父さんをたずねることにした。時たまバラック建ての民家があるので、そこで聞いた。夕方まで歩き続けて、栗林公園の近くに疎開していた叔父さん夫婦を探し当てた。皆無事で良かったです。私が無事に帰国したことを喜んでくれた。

叔父さん宅で一泊した時に祖母が終戦の日に死亡したことを聞き、私は涙がとめどもなく出た。祖母には私は大変可愛がられたからです。

一月五日、親兄弟のいる小豆島の坂手に帰った。すぐ咲山に行った。私の突然の帰宅に母も兄も皆驚いた。苦労したか母の髪は白くなっていた。兄は海軍で九年、軍艦が沈没し三回も泳いだそうです。一つ歳下の弟は善通寺師団勤務で無事でした。その夜は戦争の話に花が咲きました。そして互いに無事を喜び合いました。

兄は戦時中に美しい人と結婚していました。アメリカの叔母さんの長男は東京の空襲には再三参加したそうです。私達は間接的にはいとこ同士で戦っていたことになりました。戦後は仙台の米航空機基地に駐屯していました。

私が戦前六年間父に教えを受けた「四秀の漁」の技術を發揮する時がきました。技術は成功し問題はなかったが、戦前より少しずつ漁獲量が減少していました。二、三年は少なくなったが、まあまあだった。昭和二十四年頃からはますます漁獲量は減少するばかりでした。

私は母と姉のすすめで、昭和二十一年四月二十日に結婚しました。昭和二十五年の春、鶏舎を建て一〇〇羽の養鶏を始め、妻の内職として収入の増加を計ることに成功しました。翌年は二〇〇羽、次に三〇〇羽としました。

漁業は一年一年漁獲量は減少していた。二十六年に安田の現在地に、四〇〇坪を手付金一割の納入で売買契約しました。その秋、鶏舎を建てたが完成前の十月十三日大風で倒壊した。残るものは借金だけだった。

二年後に土地二〇〇坪を売り、残る二〇〇坪の登記をした。二十九年四月二日、鶏舎とバラック建の家が出来、三人の子供を連れ移住した。養鶏も環境が悪いのか、咲山ほどには産卵量がなく誤算でした。三十年

には四人目の三女が産まれた。このころから四十年頃までは、貧乏のどん底であった。百十四銀行と苗羽農協に多大な借金があった。

四十年頃より少しずつ生活も良くなってきた。その頃妻は養鶏を廃業し衣料品の行商を始めていた。私はそのころ従業員四、五〇名の小さな佃煮會社の工場長をしていた。

昭和四十三年に新築計画の半分を建て、残りの半分は五十年に新築した。今は子供一男三女と、十人の孫がいます。現在は年金生活ですが幸せな毎日です。

叔母さん夫婦は終戦後数回小豆島に会いに来ました。第二次大戦中強制収容された日系人への補償金が二万ドル支給されるとのことでした。

私は今はただ、亡き戦友のご冥福をお祈り申し上げます。

### 【解 説】

第六十師団(矛)は、昭和十七年二月師団編成となったが、基幹となったのは独立混成第十一旅団(独立歩兵第四十六、五十大隊)広島師団管区であった。そ

れに独立歩三個大隊および野戦病院が同十七年五月二十三日、現地に到着したのである。

警備、清郷工作に任じていたが、昭和十九年六月初旬、軍令により第五十五旅団長の指揮下に入り、浙閩(浙江省、福建省)沿岸の作戦に参加、六月二十三日、昭和二十年二月二十七日まで行動したのである。

昭和十九年六月というと、中支湖南省においては湘桂作戦が発起され、衡陽攻略戦の最中であつた。また、東支那海、南支那海の戦局は逐次激しさを増し、敵の潜水艦雷撃、空襲も頻繁に行われ、浙江・福建・広東省沿岸の防備を強化しなければならない時期になつて、浙閩作戦、温州攻略戦が実施された。

独立歩兵第四十七大隊(矛第三三一八部隊)は、独立混成第十旅団隷下から、師団編成にともない改編されて、第六十師団隷下となった(昭和十七年四月二十日編成完結)。初代大隊長は陸軍大佐大沢勝二、昭和十八年九月陸軍大佐須川恒雄、同十九年五月陸軍少佐後藤学、同二十年二月、陸軍大尉堀田周である。

編成当時は江蘇省蘇州において同地付近の警備なら

びに清郷工作。昭和十八年四月宣興県宣興付近の警備。九月三十日、十月三十一日、広徳作戦（安徽省南部蕪湖東南方）に参加（第六十一師団Ⅱ鶏部隊基幹）す。

以後、宣興県張諸鎮付近警備。漂陽県漂陽付近警備。

七月二十三日浙閩沿岸作戦には後藤学大隊以下約八〇〇名出動、残置隊は第二、第三、第四中隊を基幹とし西山大尉留守隊長となり漂陽付近を警備す。

昭和二十年二月、後藤少佐以下の大隊主力は独立歩兵第二四〇大隊となり、残置隊が新たに第四十七大隊を編成し前任務を継続し、宣興において同地付近の警備に任ず。

復員完結、昭和二十一年三月二十四日（復員時の人員一、一二〇名）

## 私の青春と参戦の実状

### ― 生還後の感想について ―

山形県 滝田吉郎

先代父・忠四郎の長男として当地に出生、西郷尋常高等小学校を卒業し父の家業を継ぐ。

当時青年学校において厳しい軍事教練を受け、また、日中戦争も熾烈極まる昭和十五年七月五日、臨時召集を受け、山形歩兵第三百三十二連隊・第五中隊第四班に編入。一期検閲までは擲弾筒班にて猛訓練に励んだ。

やがて十一月となり、戦地さながらの師団秋季大演習に参加した。実戦同様の大規模な演習も無事終了、一段落と同時に海外派遣の噂も耳にされ、同時に、新品の完全軍装の品々がすべて整った矢先、陸支機密により外地派遣が急変し、意外にも召集解除の命令が出た。しかし隊長より「これは一時的で、健康に注意しての待機である」との訓示を受け、一旦、帰郷解除と